小学生作文にみられることばの変化

——特に敬語の変遷をめぐって——

鈴木　智映子

0．はじめに

本稿は、近代日本社会における敬語意識や敬語規範の転換が、具体的な敬語の使用にどう反映していったかを考察するために、学習院初等科の作文集『小ざくら』を選び、特に、対人意識と敬語表現の変化をめぐる問題を取り上げた。

『小ざくら』は学習院初等科生徒の作文・詩・習字・工作などの作品と初等科の年間行事の記録、教員の随想・報告を載せた文集である。この文集は72年前、大正15年（1926）11月の機関誌創刊に端を発している。

当時の初等科長・石井国次教授は、欧米の子供達に備わっている研究心や創作力を、日本の子供にも培いたいと考え、夏休みの「自由研究」なるものを初等科生徒に課した。大正15年（1926）、その発表の場として生まれたのが初等科機関誌『小ざくら』である。当時の『小ざくら』には生徒の自由研究・作文・詩・和歌・俳句、さらに図画、習字等のほか、学校日誌や学校だより、教師の随想などが掲載されており、当初は年２回の発行であった。戦争の勃発とともに発刊が難しくなり、昭和20年から25年まで休刊、昭和26年に復刊され、以後、年１回の発行となっている。その間、昭和22年の文部省の学制変更に伴い、六三制が実施され、新しい学習院初等科も旧来の初等科と女子学習院が合併し、男女共学となっている。

本稿では、戦前は「綴方」、戦後は「日々のできごと」、「楽しい思い出」、「おりにふれて」、「ことばゆたかに」などの、作文（詩・和歌・調査文・感想文などは除いた）を５年ごとに取り上げ、調査を行った。（表１）[注1]

表１　使用作文数

大正15	昭和６	昭和11	昭和16	昭和19	昭和26	昭和31	昭和36
120編	131編	144編	113編	42編	120編	105編	124編
昭和41	昭和46	昭和51	昭和56	昭和61	平成３	平成８	
140編	172編	177編	157編	195編	183編	178編	

1．敬語の変遷―『礼法要項』から『これからの敬語』へ―

昭和20年（1945）8月15日の敗戦を境とする、その前後の敬語の変化がどのような性質のものであったのかを考えるために、戦前と戦後の敬語の規範となった、『礼法要項』（第五章「言葉遣ひ」）と『これからの敬語』を比較してみたい。

昭和16年（1941）に、文部省は、中等学校の礼法教授資料として、『礼法要項』を制定したが、戦前の規範としての敬語は、皇室崇敬を中心とし、君臣、父子、長幼の序、上下の身分を言語的に示すためのものであったことが明示されている。

昭和27年（1952）5月に発表された『これからの敬語』は、新しい時代にふさわしい敬語のあり方を示したものとして教育、公用語、新聞、放送、出版から国民生活にまで広く影響を及ぼし、今日に至っている。その「基本方針」を見ると、その一と二に『礼法要項』との相違点がはっきりと認められる。（下線は筆者）

一　これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語はその行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

二　これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

『礼法要項』の「言葉遣ひ」の章に示すところは、「長上に対して」の言葉づかいを中心とするものであった。これに対して、『これからの敬語』は、「各人の基本的人格を尊重する相互尊敬」の上に立つ敬語の使い方の基準を立てようとするものであることを明確に示している。

戦前の『礼法要項』は、「上下敬語」の指導書、戦後の『これからの敬語』は、「左右敬語」の指導書である、という意味で、「階級敬語」から「社交敬語」への敬語の理想が戦前、戦後で大きく変貌を遂げたということができる。

2．『小ざくら』での敬語使用の変化

2.1　家族・先生に対する敬語使用

『小ざくら』では、家族間あるいは先生に対して、どのような敬語使用がなされているかを調査した。両親（祖父母・おじ・おばまで含む）・兄弟（兄・姉）・先生に関する記述のうち、敬語使用の有無を調べた調査結果が、表2-1, 2, 3である。[注2]

戦前に関しては、両親に対する敬語は高い確率で使用され、兄弟に対しても、半数以上が敬語を用いている。また、先生に対しても、ほぼ大半の生徒が敬語を使用していることがわかる。

オヂイサマガニツクワウニツレテイツテクダサイマシタコトト、（大正15，1年）

長い病院生活に苦しんで入らつしやるお母さまにお見せしたら、大そう喜んで下さ

(表２－１）両親に対する敬語使用の有無

	全体数	敬語有	%
大正15年	63	57	90%
昭和6年	87	70	80%
昭和11年	110	95	86%
昭和16年	54	53	98%
昭和19年	32	30	94%
昭和26年	51	33	65%
昭和31年	118	60	51%
昭和36年	139	37	27%
昭和41年	170	31	18%
昭和46年	120	23	19%
昭和51年	233	16	7%
昭和56年	182	18	10%
昭和61年	164	12	7%
平成3年	132	11	8%
平成8年	87	3	3%

(表２－２）兄弟に対する敬語使用の有無

	全体数	敬語有	%
大正15年	27	24	89%
昭和6年	23	19	83%
昭和11年	28	19	68%
昭和16年	18	11	61%
昭和19年	8	4	50%
昭和26年	4	1	25%
昭和31年	42	1	2%
昭和36年	40	1	3%
昭和41年	44	2	5%
昭和46年	5	0	0%
昭和51年	42	0	0%
昭和56年	24	0	0%
昭和61年	27	0	0%
平成3年	8	0	0%
平成8年	18	0	0%

(表2-3) 先生に対する敬語使用の有無

	全体数	敬語有	%
大正15年	28	28	100%
昭和6年	24	22	92%
昭和11年	35	34	97%
昭和16年	31	30	97%
昭和19年	22	21	95%
昭和26年	42	29	69%
昭和31年	17	9	53%
昭和36年	41	26	63%
昭和41年	51	20	39%
昭和46年	37	20	54%
昭和51年	38	16	42%
昭和56年	53	29	55%
昭和61年	42	22	52%
平成3年	36	18	50%
平成8年	55	35	64%

つた。(昭和11, 6年)

お兄様は一つお食べになつてお風呂にお入りになつた。(昭和11, 4年)

このように、目上のものには、たとえ、両親・兄弟であっても、敬語を使用するといった意識が戦前にはあったことがわかるが、戦後すぐにこの意識は大きく変化し、年々、敬語使用が減少していることが、明らかである。

〔戦前〕オ父サマニヒカウキノナヲウカガフト、「ギンツバサダ。」トヲシヘテ下サイマシタ。(昭和19, 1年)

〔戦後〕おかあさまに、「‥‥」といったら、おかあさまは「そうね。」とおっしゃって、(昭和26, 3年)

わたしはおかあさまに、「ここの人たちだけで、なん人いるの。」ときくと、おかあさまが、「二まん人ぐらいいるんじゃないの。」とこたえました。(昭和56, 1年)

両親に対する敬語は、戦前から戦後にかけての昭和19年から26年に大幅に使用率が下がり、また、31年から36年の間にもほぼ半数に減少している。その後、昭和50年代以降は約1割の敬語使用がみられ、しばらく大きな変化はみられないが、平成8年には、87例中3例しか敬語が使用されていない。平成3年の132例中11例使用と比べても、敬語の使用が減少していることは明白であり、平成時代に入ると、家族間の敬語使用の意識が、再び変化していると、推察される。

兄弟に対する敬語に関しても、戦後、使用率は大幅に減少している。昭和26年以降、何人かが兄弟に対する敬語を使用してはいるが、46年以降は兄弟に対しての敬語使用例

は1例もみられない。両親に対する敬語使用率が、1割以下になるのは50年代であるのと比較しても、敬語を使用しなくてもよいという意識は、家族間でも兄弟に対する敬語の方が早く浸透していたことが明らかとなっている。現代では兄弟は敬意をもって接する対象と意識されていないと、推察できる。

これに対し、先生に対する敬語使用率は、現在でも5割前後みられる。戦前は、ほぼ全員が先生に対し敬語を使用していたのに比べれば、戦後は4割～6割の間を上下していて、確かに敬語使用率は減少している。しかし、家族に対する敬語使用率のようには大幅に減少することはなく、むしろ平成8年には増加している。このことは、敬語使用が、上下関係から場面による使い分けに移行した結果、ウチ・ソトの概念が働き、家族に対してはウチ、先生に対してはソトと意識するようになったために、先生に対する敬語使用が増加している、と考えることもできるのではないだろうか。

2.2 尊敬語と謙譲語の使用

〔戦前〕センセイモオヨロコビニナツテ、「‥‥」トオツシヤイマシタ。
(昭和6，1年)
おいそがしくお仕事をなさつて居られる先生もいつもお元気に朝礼に出られ一人一人をよくみて下さる。(昭和19，5年)

〔戦後〕バスの中では、先生が本を読んで下さいました。(昭和41，3年)
松山先生がいらっしゃって、「山ざきはどうした。」とおっしゃいました。
(昭和51，1年)
「花たばぞうてい。」と、教頭先生が言われた。(昭和56，4年)
先生から「おさえる手を前にやらないように。」というご注意がありました。
(平成8，4年)

このように、敬語使用の例をみていくと、全体として、敬意の高い敬語から低い敬語へ変化していることがわかる。いわゆる敬語の簡素化である。

そこで、家族・先生に対して敬語が使われているもののうち、どのような敬語が使われているか、尊敬語と謙譲語について調べてみた。それが表3-1,2である。

2.2.1 尊敬語

まず、全体的に敬語使用率が減少していることは先に述べた。

尊敬語に関して見てみると、

①「お・ご～になる」の使用が減少している。

昭和56年に3例あるのは例外的で、昭和41年以降は使用されていない。また、「お・ご～くださる」も大正15年に3例あるのみで、その後、使われていないことがわかる。

これは最高の敬語表現が用いられなくなっていることを意味し、敬語の簡素化の現わ

れの一つと解釈できる。

②「おっしゃる」は全体を通じて使用例が多い。

特定形の尊敬語は、今日使われなくなっている尊敬語であることが指摘されているが、「おっしゃる」は他の「なさる」、「くださる」、「御覧になる」などと比較してみると、廃れていない尊敬語ということが出来よう。山口（1995）も、「おっしゃる」はまだ比較的よく用いられ、さほど衰えを見せていない尊敬語である、と述べている。

『小ざくら』の中に出てくる、「言う」の他の尊敬表現を調べてみると、戦前では「言っていらっしゃる」、「仰せられる」、戦後では「言われる」、「言っていらっしゃる」、「言ってくださる」などの形が用いられてはいるが、各年、少数の例を見るのみで、「おっしゃる」が、どの時代を通じても圧倒的多数を占めている。[注3]

③「～てくださる」は（謙譲語の「～していただく」も同様に）現在でも比較的使用例の多いものである。宮地（1985）は、現代敬語の特質の一つとして、「～てくださる」「～ていただく」などの、受給表現にかかわる補助動詞の多用をあげているが、両親・先生とは授受の関係がなりたちやすいことも、「～てくださる」（「～ていただく」）がしばしば使用される要因の一つと考えられよう。

④それに比べ、「～ていらっしゃる」の形は減少している。

昭和30年代頃までは、「～ていらっしゃる」は「お・ご～になる」や「～てくださる」とともによく用いられているが、現在「～ていらっしゃる」の使用例は少なくなっている。

山口（1995）は、「いらっしゃる」の形式は、あまり使われなくなっている尊敬語の代表であると述べているが、『小ざくら』からも、このことが明らかになっている。

⑤現在、敬語表現の中でも頻繁に用いられる「れる」「られる」については、今回の調査でははっきりとした傾向は見られなかった。しかし、現在、他の尊敬表現が減少する中で、「れる」「られる」の表現は、目立った減少傾向が見られないことからも、今後も変らず使用されていくだろうと予想される。

2.2.2 謙譲語

現在では、謙譲語は尊敬語以上に全体の使用数が減っている。昭和56年の先生に対する敬語の中には1例も見られず、その後も、家族・先生に対する敬語全体で、毎年5例前後が見られるだけである。

①まず「お・ご～申し上げる」（大正15年に1例）、「お・ご～いたす」（昭和19年に1例）などの敬意の高い謙譲語が用いられなくなったことは、尊敬語と同様である。「～てさしあげる」も大正15年に1例のみ使用されている。

②「お～する」の表現も使用が少なくなっている。

戦後も昭和30年代くらいまでは、謙譲語の代表的な言い方とみることができるが、昭

（表３－１）尊敬語の変化

	大正15年	昭和６年	昭和11年	昭和16年	昭和19年	昭和26年	昭和31年	昭和36年	昭和41年	昭和46年	昭和51年	昭和56年	昭和61年	平成３年	平成８年
お・ご～になる	14	21	21	22	6	3	4	2	3	0	0	3	0	0	0
お・ご～なさる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
お・ご～くださる	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
お・ご～だ(です)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
～なさる	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
～ていらっしゃる	12	17	20	10	7	7	10	5	3	3	2	4	2	1	0
～てくださる	9	14	13	9	6	12	9	13	8	14	9	6	8	10	7
～（ら）れる	2	6	5	3	4	0	2	1	2	1	1	7	0	1	3
おっしゃる	29	40	52	31	16	20	28	26	27	14	15	14	16	8	14
いらっしゃる	5	3	7	6	1	4	3	2	1	1	1	3	2	1	6
なさる	0	0	1	6	1	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0
くださる	0	0	2	0	1	1	0	0	3	1	0	0	0	0	0
ごらんになる	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
なくなる	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	1	2	1	2	1
合計	76	102	121	89	43	48	60	49	48	34	30	40	29	23	31

（表３－２）謙譲語の変化

	大正15年	昭和６年	昭和11年	昭和16年	昭和19年	昭和26年	昭和31年	昭和36年	昭和41年	昭和46年	昭和51年	昭和56年	昭和61年	平成３年	平成８年
お・ご～する	3	6	15	6	2	5	3	4	1	2	0	1	0	0	1
お・ご～申し上げる	3	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
～ていただく	2	2	12	5	2	3	6	3	2	4	0	6	1	0	2
～てさしあげる	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
お・ご～いたす	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
さしあげる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
いたす	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
いただく	3	2	0	0	0	0	0	0	4	4	0	1	1	4	3
うかがう	0	6	6	2	2	1	2	5	0	0	0	0	1	0	0
お目にかかる	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
まいる	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
拝見する	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	15	16	35	14	8	10	11	12	7	10	1	8	3	4	6

和51年以降は（昭和56年、平成８年に１例あるが）、ほとんど使用されていないとみなしてよいだろう。

最近は、「お～する」を尊敬語として誤用する傾向にあることも、指摘されているように、使い方の難しいこの語は今後ますます使用されなくなっていくだろう。

③むしろ、尊敬語と同様に授受を示す敬語である「～ていただく」、「いただく」の使用が増加している。

敬語が身分の上下でなく、人と人との円滑なコミュニケーションのための道具となった現在では、必要なのは尊敬語や謙譲語ではなく丁寧語になっていくだろう。それゆえ、敬語は出来るだけ簡素な表現となり、同時に第三者に対して敬意を示す表現は、今後、ますます衰えていく、と思われる。

2.3　家族に対する呼び方

次に、両親（父親、母親）に対する呼称についても考えてみよう。（表４－１，２）

戦前は、ほとんどが「お父さま」「お母さま」の呼称が使用され、高学年になると「父」「母」が現われる。[注4]戦後に入って、昭和26年には、「お父さん」「お母さん」、「パ

表４－１　父親に対する呼称

	大正15	昭和６	昭和11	昭和16	昭和19	昭和26	昭和31	昭和36	昭和41	昭和46	昭和51	昭和56	昭和61	平成３	平成８
おとうさま	18	26	28	15	10	4	21	6	2	8	12	12	13	7	9
父上	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
父	1	1	3	0	0	2	4	2	6	2	14	8	11	5	8
おとうさん	0	0	0	1	0	1	5	6	13	4	9	10	1	10	8
おとうちゃま	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
パパ	0	0	0	0	0	1	1	11	13	6	1	3	3	2	0

表４－２　母親に対する呼称

	大正15	昭和６	昭和11	昭和16	昭和19	昭和26	昭和31	昭和36	昭和41	昭和46	昭和51	昭和56	昭和61	平成３	平成８
おかあさま	29	24	35	19	5	9	25	21	10	21	15	20	25	10	9
母上	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
母	1	2	2	1	0	6	5	8	9	6	17	14	14	11	14
おかあさん	0	0	0	1	0	3	6	10	23	5	16	19	11	15	8
おかあちゃま	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
ママ	0	0	0	0	0	2	1	16	12	11	3	4	2	4	0
おたあさま	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

パ」「ママ」の呼称が使用されるようになり、36年には「パパ」「ママ」が急に増加しており、定着した観さえうかがえる。要因としては経済成長期の核家族化の影響が考えられる。

そして、41年には、「お父さん」「お母さん」が「お父さま」「お母さま」を越えているが、46年では元にもどり、以降「お父さん」と「お父さま」、「お母さん」と「お母さま」の呼称が同じように使用されている。現在では小学校の受験用に、「お父さま」「お母さま」の呼称を使うように躾られている生徒もいるだろう。

また、注目すべき点として、46年以降、「パパ」「ママ」の使用が減少している。はっきりとした要因はわからないが、金田一（1978）は、昭和40年代半ばに「家庭ではパパ、ママという呼び方が減り、『お父さん』『お母さん』がふえつつある」と述べ、背景として、この時代に、言葉・文章に復古調のものが用いられる動きがあったとしている。[注5]

そして、それに対応して、昭和46年以降、「父」「母」の親族名称が増えていることも、明らかになっている。平成８年には「パパ」「ママ」が全く使われていないことと併せて考えると、敬語が「場面に基づいて」使われるようになったことと、関係があるのかもしれない。

上記のことを考える上で、戦後の「父」「母」使用の学年比を出してみた。（表５）

これによると、「父」「母」の名称は、ほぼ４年以上の高学年に限られている。これは、学校内での教育を考慮に入れても、小学校高学年の年令になると、他の人に家族のことを話す時は、「父」「母」を用いるべきだ、という意識が働くようになるとも見なされる。

また、学年別の敬語使用をみると（表６－１，２）、先生に対しては、敬語使用の学年

（表５）「父」「母」の学年比

	１年	２年	３年	４年	５年	６年	合計
昭和26年	0	0	0	0	6	2	8
昭和31年	0	0	0	0	7	2	9
昭和36年	0	0	1	1	5	3	10
昭和41年	0	0	1	5	4	5	15
昭和46年	0	0	0	1	3	4	8
昭和51年	0	0	8	6	8	9	31
昭和56年	0	0	0	8	5	9	22
昭和61年	2	0	2	4	12	5	25
平成３年	0	2	0	0	5	9	16
平成８年	0	0	6	4	5	7	22

（表６－１）学年別敬語使用（家族）

	１年	２年	３年	４年	５年	６年	合計
大正15年	4	8	14	17	10	28	81
昭和６年	16	12	8	14	30	9	89
昭和11年	4	48	19	21	12	10	114
昭和16年	11	12	7	18	10	6	64
昭和19年	12	8	4	5	0	5	34
昭和26年	7	2	6	10	7	2	34
昭和31年	12	18	4	19	6	2	61
昭和36年	8	9	6	4	9	2	38
昭和41年	4	10	14	4	0	1	33
昭和46年	4	15	1	3	0	0	23
昭和51年	1	9	1	3	2	0	16
昭和56年	1	2	3	10	1	1	18
昭和61年	2	3	3	2	2	0	12
平成３年	2	3	4	2	0	0	11
平成８年	1	1	1	0	0	0	3

（表６－２）学年別敬語使用（先生）

	１年	２年	３年	４年	５年	６年	合計
大正15年	0	6	3	2	10	7	28
昭和６年	6	2	2	1	9	2	22
昭和11年	3	7	1	1	7	15	34
昭和16年	0	2	4	3	12	9	30
昭和19年	1	2	1	0	13	4	21
昭和26年	1	5	5	6	8	4	29
昭和31年	0	2	3	0	0	4	9
昭和36年	1	5	8	1	6	5	26
昭和41年	1	2	6	4	0	7	20
昭和46年	0	5	2	7	3	3	20
昭和51年	3	2	1	0	7	3	16
昭和56年	1	0	4	7	11	6	29
昭和61年	0	0	8	8	5	1	22
平成３年	2	3	5	3	1	4	18
平成８年	5	5	8	8	2	7	35

差はあまりみられず、ほとんどが個人差となっているのに比べ、家族に対する敬語使用は、高学年では少なくなり、表5と表6－1の網掛け部分がほぼ重なっていることも興味深い点である。

「父」「母」の名称を使用する割合が高い高学年では、また家族に敬語を使わないといった意識が働いていることがここからも推察される。

柴田・鈴木（1959）「人前で『母』というようになる年頃」についての調査によると、小学校ではほとんど「母」と言わないのに対し、高校では大部分の人が「母」というようになり、「母」の率は中学校にあがるときに急激に高まることが明らかになっている。人前では呼称を使わず、正しく名称を使用するという意識が身に付くのは、一般には中学生段階とみられるが、『小ざくら』では、やや早いと見ることができよう。

さらに、家族間の敬語使用および先生に対する敬語使用の男女差（戦後のみ）に関しては、女子の敬語の使用例が多いという傾向がみられた。本稿では詳しく言及することはできないが、戦前の男女差も含め、今後、さらに、検討を加えていきたい。

3．むすび

本稿で、『小ざくら』調査を通して明らかになったことは、次のような点である。

1　戦前は上下関係、身分関係を基盤とした敬語使用が行なわれたのに対して、戦後は固定的な関係ではなく、場面に基づいた敬語使用が行われている。

2　場面に基づく敬語使用では、対者敬語としての丁寧語が多く使用される。従って、第三者を高める尊敬語、謙譲語の使用は減少した。

3　敬語の「簡素化」が進んでいる。

4　このような調査結果は、「これからの敬語」が奨励している点とほぼ一致している。

5　『小ざくら』では、すでに小学校高学年段階で「父」「母」に移行しているのは、学習院の特殊性か、あるいは指導の結果とみられる。

なお、本稿では、男女差の問題に関しては十分考察を行うことができなかった。また学習院初等科以外の、いわゆる一般の小学校の文集もこの問題を深めるためには不可欠な資料である。これらの問題点を今後の課題として、さらに調査を進めていきたい。

注

1　昭和21年は休刊のため、昭和19年の作文で調査を行ったが、戦中で、作文の数が少なくなっている。

2　会話文は除き、地の文のみを取り上げて調査を行った。

3　「（ら）れる」は、現在、尊敬表現の主流となっている。
　そのため、『小ざくら』の中でも、「言われる」の形式が多く使用されると予想されたが、「言われる」は尊敬語としてよりも、むしろ、受身形としてよく用い

られている。

4　明治の国定教科書で「おとうさん」「おかあさん」が採用されるが、当時の学習院では、教科書に出てくる「おとうさん」「おかあさん」を、わざわざ「おとうさま」「おかあさま」に書き直させていたことが知られている。

5　金田一（1978）の指摘によると、昭和46年には、国語審議会で、当用漢字の改訂音訓表が承認され（例えば「きく」という単語に対して、「聞く」のほかに「聴く」が認められた）、47年にも送り仮名の改訂により、昔のような自由が許されていることも、このような動きである。

参考文献

大石初太郎（1978）「敬語の新生」『ことばの昭和史』朝日選書
大石初太郎（1983）『現代敬語研究』筑摩書房
学習院百年史編纂委員会（1981）『学習院百年史 第一編』
学習院百年史編纂委員会（1980）『学習院百年史 第二編』
学習院百年史編纂委員会（1987）『学習院百年史 第三編』
菊地康人（1997）『敬語』講談社学術文庫
金田一春彦（1978）「言語生活五十年の歩み」『ことばの昭和史』朝日選書
国立国語研究所（1990）『敬語教育の基本問題（上）』大蔵省印刷局
国立国語研究所（1992）『敬語教育の基本問題（下）』大蔵省印刷局
国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識 岡崎における二十年前との比較』三省堂
柴田武・鈴木たか（1959）「『母』と言うようになるまで」『言語生活』９８号
田中章夫（1985）「言葉と人間関係」『国語教育』１月号
田中章夫（1988）「対人意識と敬語表現」『国文学』第33巻15号
辻村敏樹（1992）『敬語論考』東京堂出版
西田直敏（1987）『敬語』東京堂出版
林四郎・南不二男編（1973）『敬語講座６ 現代の敬語』明治書院
南不二男（1987）『敬語』岩波新書
宮地裕（1985）「待遇表現」『日本語教師用参考書Ⅰ 言語行動と日本語教育』凡人社
山口仲美（1995）「尊敬表現の現在―衰退の流れのなかで」『国文学』第40巻14号